

平等主義文化における排斥と蔑み

池上知子

(大阪市立大学)

いじめの様態はさまざまあり、その定義も識者によって一貫しないことが多い。本発表では、いじめの本質は「異質な存在に対する排斥と蔑み」であるにとらえ、いじめ行為の社会心理学的背景について考察したい。平等主義教育がゆきわたっている現代社会では、大人も子どもも、自分たちと異なる社会的背景を持つ者、自分たちにはないハンディキャップを背負っている者に対しても、同じ人間として平等に接するべきであるとの理念は共有されていると考えられる。けれども、そのような理念とは裏腹に、往々にして、こうした者たちがいじめの対象とされやすい。それはなぜかを、社会的アイデンティティ理論の視点から考えてみたい。

社会的アイデンティティ理論に基づけば、人は、自分が所属し自己同一視している集団（内集団）の価値を高く評価することによって自尊心を維持しようとすると考えられる。その際、自分が所属する集団とは異なる集団（外集団）との差異化をはかることで所属集団の価値を優位に保とうとする心理機制が働く。それは、内集団の価値を脅かす外集団を否定し、排除しようとする態度に表れる。加えて、内集団と外集団の差異が不明確になり、両者を弁別することが困難になると、その傾向は一段と強まる。集団所属性にもとづく自尊心が脅威にさらされることを意味するからである。たとえば、男性同性愛者は、男性でありながら男性規範から逸脱した性指向をもつゆえに、男性異性愛者からは、男性アイデンティティを脅かす存在とみなされやすいと言われている。ところが、男性同性愛者と男性異性愛者の間には生物学的に決定的な相違があると知らされると、そのような脅威が低減し、男性異性愛者がジェンダー自尊心を防衛するために取る男性同性愛者に対する否定的態度が緩和されることを示す研究が存在する（Falomir-Pichastor & Mugny, 2009 など）。そこには、平等主義的人間観と社会的アイデンティティの維持、防衛との間で葛藤する人間の複雑な心理が見て取れる。これは、セクシャル・マイノリティをめぐる問題に止まらず、さまざまないじめ行為（排斥と蔑み）に共通に潜む心理かもしれない。

本発表では、セクシャル・マイノリティへの嫌悪と不安を示す実際の事案に触れつつ、社会心理学における実証的研究を例に挙げながら、「異質な存在」を人はなぜ蔑み、排除しようとするのか、どのような場合に「異質な存在」に対して人は寛容になれるのかを考察する。そうした議論を通して、いじめ行為の本質に迫るとともに、問題の解決に向けて糸口を探りたい。